

『#関心領域 (The Zone of Interest)』(マーティン・エイミス著)を読んでみた。著者は英国を代表する作家であり、2023 年死亡。父親も同じく作家で風刺のきいた小説で人気を博した。本書をなかなか借りられなくて、先に動画『#関心領域 (The Zone of Interest)』(2023 年)を amazon prime video で視聴して、既に Movie Review で報告した。

「関心領域」とは、そもそもアウシュヴィッツ強制収容所周辺を指す言葉だそう(本書の解説で知った)。本と映画ではかなりの違いがあるようだ。本書は 3 名の話が交互に出て来る。そしてナチス・ドイツの軍人 T と強制収容所の所長 D の妻 H との恋愛(書籍では大きな部分を占める)が、映画では大胆にも省かれている。それによって、アウシュヴィッツ強制収容所周辺「関心領域」(壁一枚隔てた隣には、ユダヤ人がガス室で虐殺されてゆく収容所があり、焼却炉の煙が立ち昇り、悲惨な叫び声)への住民たちの無関心・罪のなさが強調されている。住民の関心は、丹精した庭であり、草花が咲き誇り、友人や子どもたちが集まってするピクニックである。隣の収容所で起きることは、まるで彼らの zone of interest (関心や利害の範囲)にない。

本作には 3 人の語り手が登場するが、そのうちの 2 人すなわち T と D は共にナチス・ドイツの軍人である。もう一人は、特別労務班長であるポーランド系ユダヤ人 S。T はヒトラーの最側近として暗躍した実在の人物マルティン・ボルマンの甥という設定で、富豪の両親が事故死したこともあり、マルティン叔父の庇護を受けている。「銀のさじ」ならぬ「銀の男根をくわえて生まれてきた」と D から密かに揶揄されるように、金と家柄、さらには容姿に恵まれた T は、ナチスの情報将校としての任務よりも女性たちを誘惑することに熱心で、叔父の妻にも気に入られている。

D は、常に自分が正しく、無理解な家族や無能な同僚に囲まれながらもナチス・ドイツの高邁な理想の実現のため粉骨砕身していると信じているが、実際は精神的な脆さゆえに過度の飲酒や薬物に依存しており、T からは「大酒飲みのおやじ」と陰で馬鹿にされている。

著者は、ホロコースト自体を書きたかったわけではなく、この強制収容所に閉じこもることで国家規模での犯罪を正当化させるという不合理、また働く彼らの条件下にも人間の薄汚い本性があり、そして家庭が普通にあって日常は同じ時間を流れているということ。つまり、どんな悪事や大きな企みがあっても隣は平

然としているという不条理とその現実を書いているのだ。

恋愛要素を割愛した分、映画の方が人間の「怖さ」を浮かび上がらせているように思える。

現在、世界の各地で「関心領域」での虐殺（ウクライナ、ガザ、シリア等）が報道されている。私の日常は診療と読書、映画鑑賞で過ぎ去っていくが、果たしてこれだけでよいのだろうか。